

Mark A. Jones, Darren A. Rivett (編著)
藤縄 理, 亀尾 徹 (監訳)

「マニュアルセラピーに対する クリニカルリーズニングのすべて」

内山 靖
名古屋大学

このたび、Jones MA, Rivett DA 氏が編著され、2004 年に英国で出版された “Clinical Reasoning for Manual Therapists” の日本語版として、標記書籍が発刊されました。

原著は、Jones MA, Rivett DA に加え、Butler D, Higgs J, Jull G, Kaltenborn F, Maitland G, McKenzie R 氏など、徒手理学療法を専門としない日本の理学療法士でも身近に感じられる豪華な執筆陣です。このような歴史的な名著となりえる書籍をいち早く理解し、ともすると労力がかかることなどから敬遠されがちな翻訳を決意されたことに敬意を表するものです。日本語の仕上がりが 500 ページ弱にのぼる大著でありながら、4 名の理学療法士によって統一感の高いわかりやすい日本語となっています。

内容は、三部 26 章からなっています。第 I 部は、「徒手療法におけるクリニカルリーズニングの原理」として導入がなされています。第 II 部は「実践におけるクリニカルリーズニング」として本書の中心をなすものです。基本的には、さまざまな急性ならびに慢性の疼痛や恐怖回避について、スポーツ、職業特性、発達段階を組み合わせた症例が提示されています。その展開は、① 主観的評価、② 客観的評価、③ 治療を基本的な共通項目として、必要に応じて、注意事項やレッ

ドフラッグ、疼痛の影響分析、精密検査、その後の治療、結果などが追加されています。本書の最大の特徴は、上記の各項目の後に「リーズニングに関する質疑と解説」として、詳細な思考過程が丁寧に解説されていることです。なぜ、そのような仮説を持ったのか、どのような過程で解釈を進めたのかなど、治療者の思考・認知の過程を明確に記述しています。第 III 部は「教育理論と教育開発」として、成人学習理論や生涯学習についての提案がされています。

Twomey L が冒頭で、徒手療法は、初期においては脊柱および末梢関節の他動運動の技術習得と画一的な臨床応用に焦点が当てられたと振り返っていますが、このことは現在でも完全に解決された課題とはいえません。臨床思考過程は、個々の事例において記述的に表現することが基本である一方で、全体を見渡すフローチャートやラダーモデルで相互補完的に全体像を提示することが望まれます。また、症状と治療手技の適用を明確に示すマッチングとしてのリーズニングの確立は、理学療法全体の極めて重要な課題となっています。

この 6 年の間には、徒手療法から徒手理学療法への名称の変更、基本用語の国際的な定義づけなどが進んでいます。徒手理学療法で強調されている生物—心理—社会的な枠組みで対象者をとらえ、主体的な治療への参加としての共同型臨床推論は、理学療法やリハビリテーション医療の根幹でもあります。

本書は、徒手療法に関心のあるセラピストはもちろんのこと、あらゆる臨床と教育にかかわる理学療法士や医療関係者にお奨めできる一冊です。

●B5 判・上製・500 頁
定価 10,500 円(本体 10,000 円+税)
2010 年 協同医書出版社・刊